

# 平成17年度施政方針

## ふなへへの「協働」による「一体的な発展」を

5月16日(月)に開催された臨時議会において、滝口季彦市長は平成17年度の施政方針を述べました。この中には、新市が一体的に発展していくための4つの基本項目が示され、その実現に向けた具体的な事業や予算の内容が示されました。なお、予算の説明は4ページから掲載しています。

平成17年3月31日、1市6町の50年を超える歴史に幕が降ろされ、新生「庄原市」が誕生いたしました。今を生きる私たちの「合併」という選択により、新しいふるさと創造への歴史の1ページが開かれたわけであり、地方分権の進展や厳しい財政状況に起因する平成の大合併は、地方の「生き残り」をかけた挑戦とも言われます。合併を選択した者の使命として、次代を担う子どもたちに受け継がれる新生「庄原市」の未来を切り開き、ふるさと夢の実現に向かって、行政、議会、市民が一丸となり、チャレンジして行かなければなりません。

私は、合併協議会の会長という立場で合併の協議・選択に加わり、また、多くの皆様のご支持をいただく中で初代市長という栄に浴しました。あらためて使命と責任の重大さを強く受け止めており、持てる力のすべてを傾注する覚悟でございます。新生「庄原市」は、その面積が、1,246.6平方キロメートルに及び、4月1日現在、全国自治体で5番目、近畿以西では最大であり、その広さもさることながら、山あい、谷沿いに家屋が点在する集落形態をも、多数、有している特徴があります。私は、広大な市域面積を課題として捉えるのではなく、この中に存在する個性や財産などを、発展へ向けての可能性、魅力と捉え、それらを活用することで、少子・高齢化や農林業の衰退、厳しい財政状況などの諸課題を克服し、「一体感の醸成」を図る中

で「一体的な発展」をめざすことが、新市の進むべき方向であると認識いたしております。

その実現に向けては、

### 第一に、新市建設計画の着実、かつ、円滑な推進であります。

この計画は、合併関係市町の合意に基づき策定された、新まちづくりの根幹を成すものであります。将来像である「げんぎ」と「やすらぎ」のさとやま文化都市創造に向け、地域の個性や魅力を活かしながら、活力に溢れ、心豊かに生活できる「お互いさま」と言い合える共に生きる社会」の実現に全力で臨んでまいります。

一方、この計画に計上された全域事業・地域事業は、合併前の各市町の財政力を踏まえ、一定の基準に基づき整理されたものではございますが、膨大な事業費を要することも事実であり、三位一体改革をはじめ、予想を超えた厳しい財政環境の変化のもとでは、すべての事業を、その計画内容で、しかも計画期間内に実現することは、現時点では極めて厳しい状況であることもご理解をいただかなければなりません。

合併した七つの市町は、それぞれ半世紀を超える歴史を刻み、共通する地域資源、美しい里山環境の中で、心豊かな生活と文化を育んでまいりました。しかし、その源となる田園風景や里山は、時代の流れとともに荒廃し、潜在する魅力が放置されたままの現状がございます。建設計画の前段、将来ビジョンの策定にあたり、市内の中学生にアンケートを実施いたしました。皆さんが未来に残したいものは何の問いに、多くの皆さんが「豊かな自然」と回答しました。春には「桜」「こぶし」「まんざく」などの花が咲き、夏には山々の新緑が輝く中で川面に鮎が跳ね、秋には紅葉を背にして黄金色の稲穂が揺れ、そして冬には純白の世界が広がります。「形見とて何を残さむ 春は花 山ほととぎす 秋はもみぢ葉、いにしえの日本人の里山に対する愛着を見事にうたいあげた良寛和尚の句でございますが、里山とともに生活があったことがしのべれます。今一度、「豊かな自然」「里山環

### 第二として、里山環境を守り活用するふるさと創造であります。

合併した七つの市町は、それぞれ半世紀を超える歴史を刻み、共通する地域資源、美しい里山環境の中で、心豊かな生活と文化を育んでまいりました。しかし、その源となる田園風景や里山は、時代の流れとともに荒廃し、潜在する魅力が放置されたままの現状がございます。建設計画の前段、将来ビジョンの策定にあたり、市内の中学生にアンケートを実施いたしました。皆さんが未来に残したいものは何の問いに、多くの皆さんが「豊かな自然」と回答しました。春には「桜」「こぶし」「まんざく」などの花が咲き、夏には山々の新緑が輝く中で川面に鮎が跳ね、秋には紅葉を背にして黄金色の稲穂が揺れ、そして冬には純白の世界が広がります。「形見とて何を残さむ 春は花 山ほととぎす 秋はもみぢ葉、いにしえの日本人の里山に対する愛着を見事にうたいあげた良寛和尚の句でございますが、里山とともに生活があったことがしのべれます。今一度、「豊かな自然」「里山環

境」に目を向け、これらを守り活かすことを通じて、ひとつには里山資源の活用による経済活動への展開、ひとつには里山環境の活用による観光・文化の振興、さらには里山生活を情報発信し、人を呼び、交流・定住を促進するため、その仕掛け、仕組み作りを進めてまいりたいと考えております。いわば「緑の環」とも言えるものであります。

農林業は、社会変動の荒波にさらされながらも、地域の生活・産業の基盤を支えております。農林業の持つ潜在的な力を掘り起こし、工夫を加えることで、その価値、魅力は再認識されるのであります。「新しいまち」だからこそ、かつて地域の生活、文化、経済を支えた豊かな環境に着目し、その復活・再生を基盤とした新たな取り組みを展開することが、未来のふるさとを輝かす一いつの鍵であると確信しております。

また、市民ワークショップ活動によるまちづくり、地域づくりへの提案と実践、県立広島大学との産学官連携による産業起こしや地域課題の解決へ向けた取り組みなど、全市民の力は、たくましく形成されつつあります。この「市民力」こそ、これからの自治体運営に求められる「行政と住民が、ともに考え、ともに汗を流す」協働の原動力として新生「庄原市」を支えるものと確信し、その力を基盤とする市政運営を図ってまいりたいと考えてるものであります。

また、地方分権社会の進展や厳しい財政状況等を背景として、これからの公共サービスの提供は、行政だけではなく、NPO、企業、団体、地域など、多様な主体が担う時代を迎えております。行政は、コーディネート機能を重視されるひとつのサービス主体に変わりつつあり、生活者を起点とするきめ細かな公共サービスを多様な主体で展開すると

### 第二として、「協働」と「補完」のまちづくりの実践に取り組めます。

合併を契機に、全域で自治振興区の組織化が図られました。自らが地域を守り、育ててきた近隣コミュニティ機能を取り戻

す中で、夢を描き、その実現に汗する市民の皆さんの意欲・機運の高まりは、協働のまちづくりに向けた明るい展望を予感させ、大きな期待を寄せるところでもございます。また、市民ワークショップ活動によるまちづくり、地域づくりへの提案と実践、県立広島大学との産学官連携による産業起こしや地域課題の解決へ向けた取り組みなど、全市民の力は、たくましく形成されつつあります。この「市民力」こそ、これからの自治体運営に求められる「行政と住民が、ともに考え、ともに汗を流す」協働の原動力として新生「庄原市」を支えるものと確信し、その力を基盤とする市政運営を図ってまいりたいと考えてるものであります。

### 第四といたしまして、行政の経営改革でございます。

地方自治の本旨は「最小の経費で最大の効果を得ること」にあり、合併前の市町におきましても、効果的かつ効率的な行政運営に向け、様々な取り組みが実践されてまいりました。しかし、この改革は、常に社会環境の変化に対応すべき、終わりのなき改革でございます。

まず、職員が行政サービスの担い手、地域リーダーとしての自覚を高め、意識改革を図らなければなりません。

一方、旧市町の歴史は、既に幕を下ろしました。合併した今だからこそ、良いこと、悪いこと、すべてをリセットし、新しく創り上げるといった視点も必要と考えております。

新市へ引き継がれた事項は、それぞれの背景・事情の中で実施されてきた経緯があり、必ずしも統一した方針、考えに基づいた内容となっていない事例もございます。そうした現状と課題を明らかにする中で点検・見直しを行い、縮減・廃止を中心とする従来の行政改革のみならず、費用対効果、民間活力の導入等も踏まえた自治体経営、地域経

## 助役・収入役・教育長が決定

4月28日の臨時議会において選任同意を受け、新市の助役、収入役、教育長が次のとおり決定しました。任期は、5月1日から平成21年4月30日までです。



入江 幸弘助役



大江 久都収入役



福永 恭司教育長

営の視点で、「行政経営改革大綱」の策定を急ぎたいと考えております。以上の4項目を基本的な視点に掲げ、今後の市政運営に取り組んでまいります。